

## 知のグローバルヒストリーへ 文明国標準と国際主義

酒井一臣(九州産業大学)

### はじめに

本報告の目的は、19世紀後半から20世紀前半の国際秩序の基盤となった「文明国標準」の思想を考察することが、知のグローバルヒストリーの可能性をもっている点を示すことである。ヨーロッパ中心史観からの脱却をはかるグローバルヒストリーにおいて重視されるのが、これまでヨーロッパからの一方通行の影響とされてきた歴史的現象が、相互に影響し合っていたことを再発見することであろう。報告者がこれまで研究してきた「文明国標準」論の研究上の意義を整理し、「普遍的」とされた西洋文明が、非西洋文明国の影響を受けて変容していく点に着目したい。一例として、国際主義の変遷と日本外交の関係を論じる。

### 文明国標準(the standard of Civilization)

国際関係論の英国学派の主張＝ヨーロッパを高見においた視点がグローバルな近代化と全般的な離陸とどのように関わったのか？

文明国標準論現れる Gong(1984)、Bowden(2009)

日本の学界での使用例

「森恪が指摘するごとく、明治維新以来六十年、日本は文明国標準主義に適合すべく社会全般を変革し、ひたすら欧米との協調外交を推し進めてきた。それに対する反発とわだかまりがアジア主義的言説として底流をなしてきたのである。」山室(1999)

→文明国標準への適合が近代日本の外交政策にどのような影響を与えたのか。政策決定過程ではなく、思想や社会の変容からそれを探る「社会外交史」を提案。ヨーロッパ側が何を野蛮としたのかではなく、日本側が何を文明としたのか？

文明国標準が支配する国際体制への参入＝どのようにして国際主義を採用するか

### 知のグローバルヒストリー

アーミテイジ(2015 原著 2013)の提起する思想のグローバルヒストリー

「資本などを扱う歴史家にとって、思想史は、immaterial という言葉の〔非物質的でかつ取るに足らないという〕二つの意味で immaterial だった。すなわち、精神世界の得体の知れない絵空事を扱う首から上の歴史のたぐいであつた。」(アーミテイジ、23)

アーミテイジは、ヨーロッパの思想がどうであつたのかに関心があるため環大西洋の視点思想の連鎖 山室(2001、2017) 偉大すぎるこの業績群を前にして、、、

知のグローバルヒストリーとしての文明国標準 Lorca(2014)

文明国標準に必要な「知」が西洋文明を受容した側にいかなる影響をもたらしたのか？ 「帝国」「国際法」「民主主義」＝制度の問題も西洋文明の「知」として導入される。

日本の特異性 「文明国標準」の迅速な順応に成功したモデルケース ブザン(2017 原著 2014)→だからこそ反動も大きく太平洋戦争という大失策につながる

**グローバルな転換** Buzan and Lawson(2015)

グローバル・トランスフォーメーション

1:工業化と市場拡大

2:西ヨーロッパの国民国家が帝国として発展したこととそれに伴う中核と周辺構造の出現

3:リベラリズムや科学的人種主義などの新イデオロギーの出現と進歩概念の結びつき

4:先の3局面が国際政治を動的として西ヨーロッパ発の「グローバルな近代」世界を生んだ

この4点が特徴だとされる。

→近代日本は、グローバル・トランスフォーメーションのなかで、国際社会と向き合う。日本をはじめとする半周縁国の国際社会への参入が欧米諸国・非欧米諸国双方に影響し、国際社会じたいの変貌につながった

**日本は国際主義に後ろ向きだったのか？**

3つの国際主義 「戦略としての国際主義」・「普遍的国際主義」・「国家主義的国際主義」

「国際」の語 漢訳洋書の万国公法中の各国交際からつくられた和製漢語

第一次大戦後の internationalism の隆盛にともない、「国際主義」の語が用いられるようになる

国家主義の対義語といった扱われかただった

**文明国標準下の国際主義**

和魂洋才的発想の西洋文明受容

「国民国家としての独自性追求と欧米のそれへの平準化という、二つの相反する方向性をもったベクトルが力動するところに描かれた軌跡、それがとりもなおさず明治国家の制度と理念に他ならなかったのである。」(山室 121)

この相反するベクトルをどう調和させるか

→戦略としての国際主義(19世紀の文明国標準)

国際秩序 力こそ正義(Might is right)

植民地拡大 勢力圏

秘密外交

国内 国民国家形成を強力に押しすすめる権威主義

国益のための国際主義

「国民外交」はウィルソニズムの影響をうけつつ「国民」が主体になって外交を行う余地が生み出さ

れたことを説明する概念であるが、その「国民」は、国益をむしろ積極的に担い、主張する主体でなければならなかった。」(芝崎 128)

※日露戦争における日本の勝利など、文明の基準はキリスト教的価値観だけでは主張できなくなっていく

### 第一次世界大戦後の「ルールの変更」＝文明国標準の変質(普遍的国際主義 liberal nationalism) とその恣意的適用

非西洋諸国の国際社会参入＝キリスト教的価値観からより普遍的な価値観の強調が必要となる  
皮肉なことに、日本はそれまでの文明国標準に順応していたため、ルールの変更に適応できなかった。くわえて、ルールの変更の適用にも恣意的なものがあつた。たとえば、日本には変更への適応を求めたが、委任統治や対中国論などは依然として古い論理のままだった。

国際秩序 戦争の違法化(ジュネーブ議定書→不戦条約)

ワシントン体制(新四国借款団)

一方で、文明国以外には委任統治・中国非国論など 19 世紀の文明国標準を適用

国内 民主化

「中国が主張する数多くの議題は、たしかにそれぞれの観点から一般的討議にかける価値があります。例えば、中国の領土保全について、フランスは全面的に受け入れるものでありますが、この問題は、中国の国境が確定されてはじめて重要性をもつものであります。」(ワシントン会議でのブリアン全権の発言 1921 年 11 月 19 日 Conference on the Limitation of Armament, 1922, p.876)

### 国際主義への留保

日本は国際主義の「何に」留保をつけたのか 普遍主義＝新「文明国標準」への疑念

→国際主義そのものを否定したわけではなく、戦争の違法化・勢力圏否定・民主化などルールの変更留保をつけた。

### 不可変のグローバル・カラーライン

「世界五大列強中日本独り人種を異にするの事情も亦同盟存続の利益を有力ならしむる事由なるへし蓋し同盟廃棄に伴ふ日本の孤立的地位延て日本か異人種たるの事情に依り外国より更に一層露骨なる排日感情の発露を被るを防止せむとせは成るへく大国の一又は二と常に密接なる関係を保持すること得策なりとす」(日英同盟協約更新に関する第一回会議録 1921 年 3 月 12 日『日本外交文書』大正 10 年第 3 冊下、995)

「日本は、恐ろしく孤立し、あるいは仲間はずれになっていると感じており、偉大な盟友イギリスと手を切つては、世界情勢の中心軸からはずれてしまい、立場を失うと感じています。現在の世界情勢は広大な東半球全体に影響を及ぼしており、そのなかにあつて日本は追放され、いわばロビンソン・クルーソーと化しているのです。」(ポールクロードルの私信、1923 年 10 月 25 日ポールクロードル(奈良道子訳)『孤独な帝国日本の一九二〇年代』草思社、1999 年)

※ルールの変更により普遍性を強めた西洋文明は完全にグローバルなものになるかと思われたが、民族自決などの普遍的とされた理想が各国の植民地で宗主国への抵抗となってあらわれる→たとえばイギリスは帝国をコモンウェルス再編せざるを得なくなり、地域主義(広域圏秩序)をみちびくことになった

※カーの『危機の二十年』のように、普遍的国際主義への欧米側からの懐疑もあった

### 国家主義的国際主義

「外に伸びんとする力に於て大和民族は世界何れの他の民族にも劣らぬ。従つて退守はその天性と自然とに反し、国策としては大禁物である。(中略)発展は日本の生命であり、大和民族の運命である。」(杉村陽太郎『国際外交録』1933年、中央公論社、428)

「杉村の個性は大国中心主義とそのなかでの序列に対する著しい鋭敏さ(特にイギリスの国際機構における「覇権」に対する)である。イギリスへの対抗意識でいわゆる「革新派」「アジア派」と共通点を持つ一方、結局のところ大国協調に回帰する点や中国には全く冷淡であった点でこれらの範疇に収められない。」(帯谷 2018 26)

「国際主義(internationalism)はその意味するところのすべてにおいて、国家主義(nationalism)の反対ではない。国際主義は、他国を排して国益を利己的に追及することに反対するが、(国際が)国民国家間関係である以上国民国家を拒絶するものではないのである。」(Dick Stegewerns ‘The dilemma of nationalism and internationalism in modern Japan,’ 10)

「多数の国家が相互に他の国家の人格を認めてある場合に、他の国家の存立発展には独立の価値があるけれども、それは自国の存立発展のために間接に役立つからだと考へる傾向と、各個の国家の存立発展には、他の国家の存立発展のために役立つと否とに拘はらず一定の価値がある考へる傾向とが区別し得られるだらう。前者は国家主義的国際主義であり、後者は個人主義的国際主義である。」(75-76)(恒藤恭『国際法及び国際問題』弘文堂書房、1922年)

→結局国家主義に 日本批判・日本の相対化を許さないナショナリズムしか育たなかった近代日本(将基面 2019)

### 地域主義＝帝国？

「生命線満洲の思想の強調、欧米追従外交の排斥、連盟脱退論の高唱、等は強硬論の諸形相として現われた。そして其結論は戦争も亦辞せずの態度となり、延いては軍備充実拡張論となるのである。此種の思想の背景には、アジア・モンロー主義の盟主として、或は世界政治の権力均衡上に於る優者としての日本の想見がある。」(高木八尺「満洲問題と米国膨張史の回顧 自主外交に対する自由主義的見解」1932年『高木八尺著作集第3巻』東京大学出版会、1971年、252-253)

「満洲国建国後の日本は、安全保障を含めた地域秩序の構築により世界平和に構築すると表明したが、(中略)普遍主義への適合努力は日本外交を正当化する手段として残ったが、アジア・モンロー主義的色彩はそれ以上に濃化していったのである。」(種稲 140)

→新秩序論で示された、有機的な関係による広域圏秩序は主権国家を否定しつつも、帝国秩序

における「国際」秩序の文脈でとらえられた。

「同盟や協商の外交的工作に自国の存立を託し、若しくは重要国策の実現を依存せしめんとするが如きは、痴人の夢と一般、不可能事である。やゝもすれば孤立日本の悩みをすら感じて居るかの如く見られる今日の日本の人心に鑑み、自分はこの点を特に強調したいのである。」(本多熊太郎『魂の外交 日露戦争に於ける小村侯』千倉書房、1942年、119)→回顧される明治国家主義的国際主義→戦略としての国際主義から抜け出せなかった近代日本外交  
※第二次世界大戦は国際主義の理想を崩壊させ、冷戦下のリアリズムをみちびくことになった

#### 参考文献

- 伊香俊哉『近代日本と戦争違法化体制』吉川弘文館、2002年。
- 帯谷俊輔「杉村陽太郎と日本の国際連盟外交」『渋沢研究』30、2018年1月。
- 帯谷俊輔『国際連盟 国際機構の普遍性と地域性』東京大学出版会、2019年。
- 後藤春美『国際主義との格闘』中公叢書、2016年。
- 小林啓治『国際秩序の形成と近代日本』吉川弘文館、2002年。
- 酒井一臣『近代日本外交とアジア・太平洋秩序』昭和堂、2009年
- 酒井一臣『帝国日本の外交と民主主義』吉川弘文館、2018年。
- 酒井一臣「ドン・キホーテの夢—「文明国標準」の帝国日本の国際秩序観—」『史林』102 巻 1 号、2019年1月。
- 佐々木雄一「近代日本外交における公正 第一次世界大戦前後の転換を中心に」佐藤健太郎ほか編『公正から問う近代日本史』吉田書店、2019年所収。
- 芝崎厚士「対外文化政策思想の展開」酒井哲哉編『日本の外交第 3 巻 外交思想』岩波書店、2013年。
- 将基面貴巳『愛国の構造』岩波書店、2019年。
- 高光佳絵『アメリカと戦間期の東アジア』青弓社、2008年。
- 種稲秀司「日本外務省と国際連盟軍縮、安全保障問題」『20 世紀と日本研究会』編『もうひとつの戦後史』千倉書房、2019年所収。
- 中谷直司「東アジア「新外交」の開始」伊藤之雄・中西寛編『日本政治史の中のリーダーたち』京都大学学術出版会、2018年所収。
- 藤村一郎『吉野作造の国際政治論』有志舎、2012年。
- 山室信一「明治国家の制度と理念」『岩波講座日本通史』第17巻(近代2)、岩波書店、1994年。
- 山室信一「日本外交とアジア主義の交錯」『年報政治学 1998』岩波書店、1999年。
- 山室信一『思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企』岩波書店、2001年。
- 山室信一『アジアの思想史脈』人文書院、2017年。
- Brett Bowden, *The Empire of Civilization*, Chicago Uni. Press, 2009.
- Barry Buzan and George Lawson, *The Global Transformation*, Cambridge, 2015
- Daniel Gorman, *The Emergence of International Society in the 1920's*, Cambridge, 2012.

Gerrit W. Gong, *The Standard of "Civilization" in International Society*, Oxford, 1984.

Marilyn Lake and Henry Reynolds, *Drawing the Global Colour Line*, Cambridge, 2008.

Arnulf Becker Lorca, *Mestizo International Law A Global Intellectual History 1842-1933*, Cambridge, 2014.

Oona A Hathaway and Scott J. Shapiro, *The Internationalist*, Penguin, Kindle edition, 2017.

Glenda Sluga and Patricia Clavin ed., *Internationalism*, Cambridge, Kindle edition, 2017.

Dick Stegewerns, ed., *Nationalism and Internationalism in Imperial Japan*, RoutledgeCurzon, 2003.

Shogo Suzuki, *Civilization and Empire*, Routledge, 2009.